

<書評>

## 伊藤 純郎 著『特攻隊の〈故郷〉 霞ヶ浦・筑波山・北浦・鹿島灘』

武藤 正人\*

アジア・太平洋戦争の終結から75年を迎えようとしている現在、戦争の「記憶」をどのように「継承」していくか、そのあり方が問われるとともに、多様化も進んでいる。「特攻隊（特別攻撃隊）」については、その激烈な様態ゆえに、一般向けの小説や雑誌などでも度々扱われている。近年、特攻隊をテーマとした映画の公開などにより、さらに幅広い年代層への関心を集めているように見えるが、そこで交わされる議論は、特攻隊員の死をどう意味付けるか、特攻という作戦をどう捉えるか、といった視点から、「ナショナルイズムと結び付けながら」論じたものが多い。

本書は、筑波大学人文社会系歴史・人類学専攻教授である伊藤純郎氏が、特攻隊の「原風景」について描いたものである。本書のいう「特攻隊の原風景」とは、最初から特攻隊員だったわけではない予科練生や飛行予備学生が、飛行訓練に励み、短い青春を送った「故郷」である霞ヶ浦・筑波山・北浦・鹿島灘という地域社会の「場」から、訓練場（飛行場）の設立や航空隊の開隊、訓練生の生活、心性にまで分け入って垣間見る風景である。したがって、本書の構成は、特攻隊の「故郷」である茨城県の各地域に沿って、次のように構成される。

特攻隊の原風景－プロローグ／霞ヶ浦のほとりで／筑波山を仰いで／北浦湖畔で／鹿島灘に向かって／特攻隊の現風景－エピローグ

「霞ヶ浦のほとりで」では、陸上飛行機と海上飛行機双方の訓練が可能となる霞ヶ浦周辺に多くの陸海軍航空基地や飛行学校が設置される経緯や、それに伴う阿見村や土浦町の変化、教育への影響について説き起こされている。次いで予科練（海軍飛行予科練習生）の成立過程が整理され、土浦海軍航空隊が「予科練揺籃の地」とされる背景が述べられた上で、1943年に発行された『土浦海軍航空隊めぐり』を手がかりに、予科練生の生活が描かれる。予科練の象徴として知られる「若鷺の歌」や、土門拳によって写真が撮られていたエピソードなどを交えながら、「甲種第一〇期生」が経験した訓練、適性検査、外出などの生活状況、そして訓練半ばでの中部太平洋方面への出撃を経て、第一神風特別攻撃隊敷島隊から第十神風桜花特別隊桜花

隊まで、82人が特攻隊員として「散華」するまでの原風景が描かれている。

「筑波山を仰いで」では、特攻隊のなかで唯一、母体である筑波海軍航空隊の隊名を冠した「筑波隊」の原風景について、職業野球選手から同隊員として「散華」した石丸進一を通して描かれている。特攻要員への意思表示は、紙片に印を記して提出する方法であったが、石丸は学生長から「全員「熱望」に〇を付けてくれ」といわれ、「熱望、希望、熱望セズ」のうち、「熱望」の箇所を大きく〇で囲ったという。

はたして石丸の本心がどうだったのかは知る由もない。ただ、「熱望」以外の選択肢を思い浮かべることすら許されない雰囲気、強く漂っていたことがうかがえる。これが、どこでも見られた特攻隊「志願」の原風景であったと思われる（99頁）。

こうして特攻隊員となった石丸らが訓練を行った北浦海軍航空隊の岸壁や格納庫の基礎は現在も残り、そこで使われた「時鐘」が現在潮来市立大生原小学校に現存し、卒業生が鳴らして旅立つ慣例が残っているという。

「北浦湖畔で」では、陸軍最初の特攻隊である「万朵隊」を生んだ銚田陸軍飛行学校を舞台として、万朵隊長の岩本益臣に関わる史料などをもとに、陸軍航空特攻隊の原風景が記される。岩本がフィリピンで戦死したその日、妊娠していた彼の妻が流産し、「きっと岩本は、一人であの世へ行くのが寂しかったので、我子をつれていったと、そう考えています」と言わしめた状況や、振武隊隊長の藤井一が、「一足お先に逝って待っています」旨の遺書を残して二人の幼子と共に荒川へ身を投げた妻子の死後に出撃したエピソードなどは、胸に迫るものがある。北浦湖畔からは、終戦直前の1945年8月13日に撃した神鷲隊まで、約180人に及ぶ特攻隊が生み出されたのである。

「鹿島灘に向かって」では、特攻機「桜花」の原風景が描かれる。現在は「桜花公園」の名と共に、石碑が無言で語るこの地は、「桜花」の訓練基地となった神之池海軍航空隊があった。この地に移転する前の百里原海軍航空隊の記述で見逃せないのは、この地に開拓農民の土地が含まれていたことである。「一週間以内の立ち退き命令」の後、住み慣れた家屋を瞬時のうちに爆破され、住民に支払われた保証金は強制的に貯

\*東京都立日野高等学校

蓄させられて、戦後、税金とインフレで消えていったという。飛行場建設の裏側で生活の場を失った人がいたことを改めて考えさせられるエピソードである。

「特攻隊の現風景－エピローグ」では、特攻隊の「記憶」を通して「現風景」が描かれる。元桜花隊員らを招いて開かれる慰霊祭が2018年夏には開催されなかったことから、戦争体験世代や軍隊経験者の急速な減少を改めて実感する。

評者は現在、都立高等学校で主に日本史を担当している。社会科教育、歴史教育実践者としての立場から、以下、本書の意義について改めて述べたい。

本書のキーワードとして、「地域社会」、「実態」、「現在とのつながり」、「記憶の継承」を挙げたい。

「地域社会」は、これまで著者が著書や論文で描いてきた「地域や郷土という足元から、国家・社会を見つめる」世界に通底する。茨城県域に数多く設置された海軍航空隊や陸軍飛行学校のうち、後に特攻隊の「故郷」となった霞ヶ浦や土浦などの地域が、「空都」として整備される中でどのような影響を受けたのか、地元の教育にも目を向けながら丹念に描かれている。百里原海軍航空隊での開拓農民に関する史実などは、歴史事象の多面性に気づかせてくれる。

特攻隊を描いたもので、隊員達がどのような学校歴をたどり、どのような資格で、どのように練習生となり、どのように訓練を受けていたのか、といった「実態」については、これまであまり触れられていなかったように思われる。本書の「霞ヶ浦のほとりで」では、予科練の制度史が整理されており、土浦海軍航空隊が「予科練揺籃の地」である由縁を具体的に知ることができる。また、『土浦海軍航空隊めぐり』をはじめ、映画、新聞、絵葉書、回想など、様々な史料を読み解くことで、予科練生の生活、心情にまで分け入って考察することができる。例えば、多種類の予科練生

や予備学生の存在が、学歴などによる相互の対立を生んだことなどは、制度や学歴による心性の機微を現在に伝えている。

「現在とのつながり」については、土浦花火大会の由来や、北浦海軍航空隊で使用された「時鐘」のエピソードだけでなく、各地に残る記念碑を読み解くことで、無言で語る記憶の場に立つことをいざなっている点や、元特攻隊員らを招いて行われる慰霊祭が開催されなくなった経緯など、「記憶の継承」と関連付けて「現風景」を問い直す手がかりが描かれている。東京都文京区の「鎮魂の碑」など、身近な地域で特攻隊の記憶が刻まれている地へ教師が足を運ばなければならぬだろう。

百里原海軍航空隊が戦後、再び開拓地となったことなど、茨城における航空隊の戦後のあり様、いわば「特攻隊の戦後」についても読みたいと感じたが、望蜀であろう。また、編集上の過誤かと思われるが、地図中の表記（「土浦海軍航空隊」と「霞ヶ浦海軍航空隊」の表記が逆）や軍事用語の表記（動詞としての「編成」（目的達成のため一時的に組織化すること）か、名詞としての「編制」（永続性を持った組織形態）か）が若干気になった。

「桜花」の名称は、「散り際の見事さから、行きて還らぬ人間爆弾にふさわしい」として名付けられたといわれるが、桜の木は、「桜花」とは違い、花が散ったのち、一年後に再び見事な花を咲かせる。行きて還らぬ「必死」の作戦に散った特攻隊員について、改めて「原風景」から問い直ししながら、記憶を忘れないための実践を行いたい。

本書は、社会科教育、歴史教育実践者のみならず、修学旅行や総合学習などに示唆するところも大であるため、全ての学校教育関係者に一読をお勧めしたい。

（吉川弘文館、2019年7月刊、224頁、1,700円＋税）